

(教育委員会用)

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	熊本県教育委員会
-----	----------

I 概要

1 事業の概要

熊本県では、内閣府と連携して国際スポーツ大会を活用したインバウンド・バリアフリーサポーターの育成に取り組んでいる。本事業では、交流及び共同学習を通じて心のバリアフリーを推進するために、熊本市東区の文教地区に隣接して所在する熊本県立盲学校と熊本県立第二高等学校において事業を実施した。

学校間での音楽や障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習に加え、外部団体（一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ）による講演会及び「ダイアログ・イン・ザ・ダーク（視覚障がい体験プログラム）」を行い、障がいに対する見方や考え方を広げたり、信頼やコミュニケーションから相互理解を深めたりした。

2 事業の成果

音楽を通じた交流及び共同学習では、盲学校のアンサンブル部と第二高校の吹奏楽部が互いの文化祭で演奏を行った。文化祭に向けての打合せや練習で、音楽という同じ土俵に立てたことで、戸惑いや壁もなく自然に打ち解けることができた。また、お互いの音楽の素晴らしさを感じることもできた。

障がい者スポーツを通じた交流及び共同学習では、盲学校のフロアバレーボール部と第二高校のバレーボール部で取組を行った。第二高校は、熊本地震で体育館が使えなくなったため、バレー部の練習に盲学校の体育館を使用していた。練習で盲学校に来ることはあったものの、お互いの関わりはほとんどなかった。今回、この交流及び共同学習で、一緒にフロアバレーボールをし、「見えるか見えないか」に関係なく、フロアバレーボールというスポーツ自体も楽しみ、「また次もやろう。」と次の約束も行うほど親しくなり、相互理解につながった。

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」に向けての講演会では、第二高校の1年生が「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」について話を聞き、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」のコンセプトや視覚障がいの方の感覚等について学ぶ貴重な機会となった。この講演会を受けて、12月に開催した「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」には、多くの生徒や教員等が参加し、少しの光もない暗闇の中、視覚障がい者のアテンドがグループを先導し、様々な活動を行った。

「見えない」ことの理解を超えて、視覚障がいのある方への尊敬を感じたり、視覚以外の感覚を使いながら、人と人との距離やコミュニケーションには何が大切なのかということを感じたりすることができた。この「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」は、熊本で初めての開催であり、このような体験が高校生うちにできたということは、第二高校の生徒がこれから様々な人と出会っていく上でとても貴重な体験であった。実施後の感想には、「障がいがある人には、その人の良いところがたくさんあり、その良さを身をもって体験することができた。すごく心強い。」「もっとたくさん人と関わろうと思いました。障がいがあるとかないとか、そんなことは全く関係なく、お互いに助け合おうとか、支え合おうという気持ちや考え方が大切なんだなと思いました。」などがあった。これから視覚障がいのある方々やそれ以外の障がいのある方々に出会ったときに、この体験で感じた感覚を思い出し、サポーターとして活躍してくれることを期待している。また、盲学校の生徒にとっても、「同じ暗闇」という条件で第二高校の生徒と体験ができ、「なぜかうれしい。」「僕は前から目が見えないが、体験した後は人のあたたかみを感じた。」などの感想があった。

今年度の交流及び共同学習を通じて、お互いの学校の距離がぐっと縮まった。この体験を、来年度からも継続していき、さらに関わりが深まることを期待したい。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

- 今回は、視覚障がい者スポーツであるフロアバレーボールを行ったが、よりたくさんの生徒を対象として交流及び共同学習を行えるような機会を検討していく必要がある。出来るだけ多くの交流及び共同学習を行えるように、早い段階で両校担当者による調整を行い、年間計画の位置づけ、時間の調整等を行っていく必要がある。
- フロアバレーボールを含め、障がい者スポーツについて、もっと広く多くの人に経験できるような機会を増やしたり、普及活動を推進したりする必要がある。
- 各校の文化祭等での音楽による交流及び共同学習では、それぞれの学校の生徒を理解する機会として非常に効果的であった。このような交流が行われていることを広く発信していくことが出来れば、より効果的だと思われる。さらに、合同練習や定期演奏会での出演など、継続して交流の機会を増やしていくとともに、他校との交流及び共同学習も視野に入れ、相互理解を広めていきたい。
- 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の講演会や体験で感じたことや気付いたことを日常生活の中で意識し、実行することで、障がい者理解を広めることにつながることもある。周囲の人に伝えることを通じて、障がい者の支援者を増やすことにつなげていきたい。

※「障害」のひらがな表記について：熊本県では、関係者からの「害」の漢字表記についての意見を踏まえ、平成20年1月から法令、条例、規則や固有名称を除き、「障がい」と表記するよう努めている。